子育て実践と子育て意識の階級差に関する研究

Class Differences in Child Rearing and Parental Values

片岡　栄美
Emi KATAOKA

要約

本稿は子育てをめぐる親への質問紙調査データから、上層ホワイトカラー層と労働階級の２つの階級フラクションを抽出し、母親の子育て実践と価値意識の階級差について検討した。主な知見は、以下の通りである。(1) 子への進学期待（4 年制大学以上）は 2 つの層で約 3 倍の格差を示した。(2) 母親のライフコースの階級差があり、労働者階級ほど結婚や出産を機に仕事を辞める率が高く、かつ出産や子育ての後に就業する率も高い。(3) 子育て意識を検討すると、子育てとは別に個人の自立的な生き方も大事にしたい価値観は上層ホワイト層の方が強い。他方、労働階級ほど仕事より育児を優先すべきという観念が強い。(4) 教育を通じた上昇移動を子に期待するのは、上層ホワイト層に強くあらわれる。勉学志向は上層ホワイト層に強く、労働者階級では子どもの将来についての平凡志向が強い。(5) 親の価値期待では、階級に関わらず日本人として支持される価値期待があるとともに、上層ホワイトは子に自立性を期待し、労働者階級は同調性を期待する傾向がみられた。(6) しつけ方法の説諭型と統制型で階級差がみられた。(7) 子どもの休日の過ごし方に階級差があり、労働者階級ほど地域や家庭に限定される傾向がみられた。(8) 親の学校行事への参加頻度に階級差はないが、保護者会への参加には差異がある。また教師への尊敬は上層階級でより高く、また教師の教え方への不満は労働者階級で高い。(9) 上層階層ほど、子どもとの日常的な接触や親の関与はより多くなり、配偶者の協力もより高い。(10) 上層ホワイト層ほど、子の勉強ハビトゥスの形成に熱心であるとともに、親自身も勉強ハビトゥスが高く、再生産されている。(11) 上層階層ほど親の文化資本や言語資本の指標は高く、家庭環境を通して子どもへの芸術文化資本や読書文化資本など文化資本の再生産が行われている。他方、大衆文化の再生産は労働者階級でより多くみられた。以上の結果から、親の経済資本だけでなく文化資本の多寡を背景とした子育て実践や教育意識を通じて、子どもの体験が階級的にある程度規定されていることが明らかとなった。子育てをめぐる異なる階級文化の存在について議論を行った。

キーワード
階級、子育て、親の価値期待、不平等、実践、子ども
Social Class, Child Rearing, Parental Values, Inequality, Practice, Childhood

Corresponding Author: Emi KATAOKA, Professor, Ph.D.
Department of Sociology, Komazawa University
1-23-1 Komazawa, Setagaya-ku, Tokyo, 154-8525, Japan
Email: kataoka@komazawa-u.ac.jp

1. 研究の目的

近年、幼少期の育ち方や家庭環境等の差異が、成人後の格差・不平等の大きな原因であることが、ヘックマン（Heckman 2006＝2015）やパットナム（Putnam 2015＝2017）によって指摘され、子育ての階級差が社会問題として注目されている。またラロー（Lareau 2003, 2011）もアメリカの子育て文化の階級差を明らかにしている。

本研究は日本の親の子育て実践の階級差に焦点をあて、3歳から中学3年生の子どもをもつ親の実態を量的調査から明らかにすることを目的としている。社会階級ごとの教育戦略の背景にある、親の教育意識やライフスタイル、価値態度、文化資本の蓄積について、それがどの程度、親の社会文化的位置と関連して存立しているかを明らかにし、子育て実践と親の子育て意識に関する社会学考察を行う。

2. 分析課題

本稿では、以下の3点について、経験的データに基づいて明らかにする。

第1に、子育て実践の階級差を検討するため、典型的な2つの階級フラクションである上層ホワイトカラー層と労働者階級を抽出し、比較することで、その特徴を明確化する。子をもつ世帯の最も上層と下層を比較するので、本稿では中間階層の子育て実践については分析から除外している。

本稿では、階級差や労働者階級という形で「階級」という用語を使用するが、理論的には社会階層の文脈で使用しており、地位序列によって抽出された一定の階層を分析対象としている。もしくは階級フラクションという呼び方を用いている。すなわち地位変数の序列性の一定の基準で抽出した部分集団という意味で使用していく。なぜならSocial Classという用語は、英語圏では一般的な使われ方をしているからである。

第2に、上層ホワイトカラー層の子育て実践や教育戦略が、主として親の文化資本に裏付けられた実践であることを明らかにする。

第3に、労働者階級の親が子育て競争から離脱する傾向は、単に持てる資本の種類と量の差異の反映なのか、それとも階級もしくは階層文化として成立していて、文化資本の世代間蓄積の差異から子育ての階級文化が成立しつつあるとみてよいのかについて議論を提起する。

いいかえれば、日本の階層状況を子育て実践を通じて、理解していく作業を行う。なぜなら第2次世界大戦のあと、約70年が経過した現在、人々は2極化して階層再生産を繰り返していくような社会になるのか、それともある程度、階層間の流動性を確保しつつ、相互に理解しうる心性やハビトゥスをもつゆるやかな階層文化の状況にあるのかを解明することは、今後の社会の結束や分断を考える上で、重要な課題の1つになると考えるからである。

子育てを通じて、上昇移動の野心をもたない階級が出現しているのかどうかは、階級

文化を論じる上でも重要な要素である。

3. 先行研究

3.1　海外の代表的先行研究

アメリカの社会学者、ラロー（Lareau 2003, 2011）は異なる階級の家族の子育て実践について詳細な質的研究を行った。彼女によれば、中間階級と労働者階級では子育て実践の階級差はかなり明確に存在している。そして、階級によって異なる子育て実践の背景にある文化資本の影響を明らかにした。

労働者階級の親の子育ての特徴は、natural growth（自然な成長、放任型）と呼ばれるもので、子どもへの親の積極的関与は小さい。それに対し、中流階級の子育てはconcerted cultivation（懸命な子育て、あるいは全面発達にむけて力を注ぐ全方位的子育て）と名づけられ、子どもへの積極的関与をその特徴とする。

ラローによれば、中流階級の家庭の親は勉学志向的であり、母親が家庭学習の補助を積極的に行うこと、学校行事への積極的参加など学校教育の補助的役割を内面化し、子どもが勉強に向かうこと、学校に適応することを支援している。言いかえれば、中流階級の親たちの特徴は、子どもの勉強ハビトゥスや公的場から利益を引き出すことのできる言語能力の形成を積極的にサポートする役割を引き受けている点にある。

それに対し労働者階級の親は文化資本の欠如や経済資本の少なさ、さらには子に関与する時間資源の欠如等から、子への関与が不十分であったり、方法がわからなかったりと、子どもが勉学志向になることへの能動的な関与が不十分になる場合が多い。

また、イギリスのボール（Ball　2003）は、教育の市場化とともに文化資本の高い階級の親の教育戦略と関与についての研究を行っている。

3.2 日本の代表的先行研究

日本では子どもの教育に熱心な親は、戦後、「教育ママ」と呼ばれてきた（二関1971）。また当時の家族社会学分野では、親子関係やしつけ方法の研究が盛んであった。

広田（1999）は、「教育する家族」という用語で、「完全な子ども＝パーフェクト・チャイルド」をめざし教育的配慮にエネルギーと資源を投入する親たちの存在を指摘した。さらに本田（2008）は、若者（15歳～29歳）とその母親のペアの意識調査（小学校時代の子育ての回顧データ）から、日本の高学歴層の母親もラローのいう「全方位型の完璧な子育て」（concerned cultivation）を志向するという知見を明らかにしている。また欧米のように中産階級と労働者階級との明確な違いの存在は否定し、グラデーションがあるという。また非教育ママの特徴を描いた（本田2004）。

片岡（2009）は、小・中学校受験をさせる教育熱心な母親たちの5類型を示すともに、高階層の親たちが子の学校選択を通じた社会的閉鎖戦略をとっていることを明らかにし

た。つまり「お受験」とは親たちの同質性志向を背景とした主体的な階層閉鎖の教育戦略である。さらに高階層の親ほど競争ハビトゥスを子どもにも伝達、再生産しようとすること、子どもの文化資本や社会関係資本にも目配りしていること、そしてしつけ方法も受験家庭のしつけは、言葉による説諭型と体罰をも使う統制型の両方を用いる、2重戦略を採用していることを示した。

これ以外にも、神原・高田（2000）、片瀬・平沢（2008）、石川他（2011）などをはじめとして、多くの研究が、親の経済資本、文化資本、社会関係資本の多寡が、親の子どもへの関与の質や教育選択の違いを左右すること、さらに家庭の社会経済的・文化的諸条件が子どもの生活の質や経験、社会関係を媒介に、社会化や発達の違いをもたらすという結論に達しており、家庭教育の重要性や母親の教育的関与の問題として論じられてきた（平沢他 2013、中澤・余田 2014）。

つまり親の教育選択や教育への価値付与、家庭環境の社会的格差は、子どもの教育体験および社会化を左右し、発達や学力達成、ひいては将来の人生の社会的成功・不成功を左右する。教育格差と親の実践をめぐる理論的な整理については、片岡（2018）を参照されたい。

4. 調査方法とデータ

筆者を代表とする研究グループでは、親の教育実践の階層性を明らかにするため、質問紙調査を 2006 年 11 月～ 12 月に実施し、世帯単位で 44.03％の有効回答を得た。

母集団は、関東 1 都 6 県に山梨県を加えた 8 都県に在住する「子どもを持つ保護者（3歳～中学 3 年生の子をもつ親、父母両方）」である。住民票を用いて層化 2 段確率比例抽出法により、該当する年齢の子どものいる世帯を 3000 世帯を選び、そのうち誕生日を基準にして、各世帯から子ども 1 人を抽出した。さらに各世帯の家族から、その子どもの男性保護者（父親）と女性保護者（母親）の約 6000 名を抽出した。あくまで子どもを基準に世帯単位で抽出しているので、シングル親世帯も含まれている。

各世帯の父母に対し、郵送法による質問紙調査を実施した結果、有効票は父親 1016 票、母親 1266 票、性別不明 1 票であった。

なお本論文では、親の教育実践について、母親のデータを中心に分析している。女性保護者全体の平均年齢は 40.82 歳で標準偏差は 6.4 であった。調査の詳細と概要については、調査報告書を参照されたい（片岡編　2008）。

5. 2 つの階級フラクションの特徴

5.1　2 つの階級フラクション：上層ホワイトカラーと労働者階級

現代の家庭の子育て実践の階層的な差異を明らかにするために、上層と下層の家族を比較するというのが、本稿の目的である。そのため、全サンプルを使用するのではなく、

子どもの教育達成の差異がもっとも大きく現れる２つの異なる階級フラクションを抽出した。フラクションとは部分集団を意味しており、ブルデューの発生論的階級構造の理論を参考にした用語である（Bourdieu 1979＝1990）。具体的には、上層ホワイトカラーと労働者階級（階層）である。

5.2　フラクション作成の根拠

家族の社会的地位を測定する指標としては、職業、収入、学歴、社会関係資本、文化資本など、多次元的な指標を用いて把握することが望ましいが、ここでは先行研究および本データの決定木分析結果も参考にして、子どもの教育達成に大きな影響を与えている変数である母親の学歴と父親の職業の２変数で階級フラクションを分類した。階級という用語を用いるが、あくまで階層論的な意味での部分集団としてフラクションを用いている。

データを詳しく検討すると、子育て実践の格差は母親学歴と父親の職業の組合せによる説明力が、職業の代わりに収入を用いた時よりも強かったからである。一例として、後出の図１と図２（子への進学期待の格差）の結果を示しておく。

5.3　労働者階級と上層ホワイトカラー層の社会的特性

表１に示すように、１つめのグループは、母親の最終学歴が高校卒もしくは中学卒であり、かつ父親がブルーカラー職種の家庭（n＝189）であり、以下これを「労働者階級」[ii] と呼ぶ。２つめのグループは、母親が４年制大学卒もしくは大学院経験者であり、かつ父親が専門職か管理職のいずれかである家庭（n＝145）で、これを「上層ホワイトカラー層」（以下、上層ホワイトと略す）とする。

各グループの構成比（母学歴と父階層が判明している全ケースに占める比率）は、労働者階級が16.6％、上層ホワイト層が12.7％である。中間階級については、今回は分析の対象外とし、子育て実践や親の価値観の階級的差異が、どのような子育て実践に最も顕著にあらわれるかを明らかにするための分析に特化している。

表１は、２つの階級フラクションの社会経済的状況をまとめた結果である。

親の学歴を比較すると、労働者階級の家庭では、母親が高校卒以下であり、その夫（子の父）の83.6％が高校卒以下の学歴である。他方、上層ホワイト層の母親は全員が４年制大学卒（大学院含む）であり、その夫（子の父）はその91.7％が４年制大学以上の高学歴である。労働者階級の親は高校卒以下を中心としたフラクションで、上層ホワイト層は４年制大学以上を中心とするフラクションであることがわかる。

世帯収入で比較しても、世帯収入の差は大きく、中央値でみると上層ホワイト層が1055万円、労働者階級が515万円であった。

母方祖父の学歴をみても、世代間において、労働者階級での相対的に低い学歴の再生

表1　2つの階級フラクションの社会的特性

	変　数	労働者階級（n＝189）	上層ホワイト層（n＝145）	
地位指標　基準1 基準2	子どもの父親の職業 子どもの母親の学歴	ブルーカラー 高校卒または中学卒	専門職、管理職 4年制大学卒以上	
学歴	父親の学歴（高校以下）	83.6%	3.4%	
	父親の学歴（4大卒以上）	8.4%（14人）	91.7%（133人）	**
収入	世帯収入（税込・年平均）	557万円	1222万円	**
	世帯収入　400万未満	29.1%（n＝53）	1.4%（n＝2）	**
	世帯年収　400万以上699万以下）	50.5%（n＝92）	14.4%（n＝20）	**
	世帯年収　700万以上	20.0%	64.2%	**
	世帯収入中央値	515万円	1055万円	**
	母親の年間収入（平均）	104万円	270万円	**
階層帰属意識	階層帰属意識　中の上／中／中の下／下	中の上 5.7% 中 44.6% 中の下 35.7% 下 1.4%	中の上 39.9% 中 51.7% 中の下 8.4% 下 0.0%	**
所有財	子ども部屋所有率	67.7%	80.0%	**
母親のライフコース	専業主婦率	28.5%	36.6%	**
	［母親］初婚年齢（平均）	24.3歳	26.8歳	
	［母親］結婚を機に、仕事や勤務先をやめた率	66.1	43.7	**
	［母親］出産や子育てを理由に仕事や勤務先をやめた率	52.7	45.4	**
	［母親］出産や子育てのあと、再び仕事に就いた率	70.5	53.3	**
文化的財 客体化した文化資本	文学全集・美術全集保有率	4.8%	21.4%	**
	ピアノ・バイオリン・フルート所有率	18.0%	62.8%	**
	美術品・骨董品所有率	2.6%	20.0%	**
	100冊以上の本（マンガ、雑誌を除く）所有率	13.8%	60.7%	**
母親の文化資本 （身体化文化資本）	専門書を読んだり、本を読むことが好きだ（よくあてはまる）	12.7%	33.1%	**
	政治や経済などの、時事問題にくわしいほうだ（よくあてはまる＋少しあてはまる）	11.1%	39.3%	**
	話し方やことば使いは、ていねいで礼儀正しい（よくあてはまる＋少しあてはまる）	35.5%	79.4%	**
社会的軌道	母親の祖父の学歴が高校以下の比率	64.2%	24.8%	**
進学期待	子どもへの進学期待（4大卒以上）	33.3%	94.5%	**
子どもの学業達成	上の方／中の上／中くらい／中の下／下の方	9.5%/19.2%/49.2%/13.4%/8.9%	23.2%/40.1%/23.9%/8.5%/4.2%	**

** p＜.05

産傾向がうかがわれる。これに対して、上層ホワイトでは高学歴の世代間再生産傾向が明確に表れている。

概して、この２つの層の持てる社会的資源は、相対的に最も豊かな層と最も貧しい層であると判断してよいだろう。

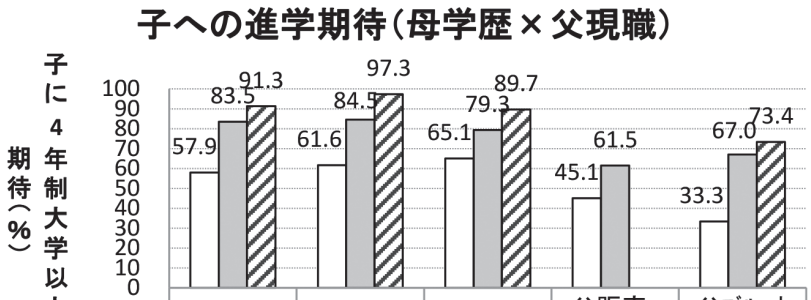
5.4　子どもの成績の格差

子どもの成績は母親の回答によるデータだが、労働者階級の家庭の子どもは、相対的に低い成績が多く、上層ホワイト層ほど成績上位者が多い。

例えば、成績が「上の方」と回答した親は、労働者階級の 9.5％に対し、上層ホワイト層では 23.2％である。また「中の上」も労働者階級では 19.2％に対し、上層ホワイトでは 40.1％となり、上層ホワイトでは 63.3％が成績が「中の上」より上位にあるが、労働者階級の子どもでは合計で 28.7％と大きな差が生じている。

6. 親の進学期待の格差：約３倍の格差

図１は、子どもに４年制大学以上を期待する母親の比率を、母学歴と父職業別に集計した結果である。母学歴が高いほど、父職業がホワイトカラーであるほど、４大以上への進学期待は有意に高い。たとえば、母親が高卒以下で父職がブルーカラーである労働者階級の場合、母親の進学期待は 33.3％だが、上層ホワイトカラーの中でも、母親が４大卒以上で父職が管理職の場合、その進学期待は 97.3％と労働者階級の３倍近くの高い期待率を示していた（片岡　2018）。



	父専門	父管理	父事務	父販売・サービス	父ブルーカラー
□母親高校以下	57.9	61.6	65.1	45.1	33.3
■母親専門・短大	83.5	84.5	79.3	61.5	67.0
▨母親4年制大以上	91.3	97.3	89.7	—	73.4

セルが n＜10 の場合は表示せず（—）。

図１　母親の子どもへの進学期待（母親データ：母学歴・父職別）（出典：片岡　2018）

下記の表２は、進学期待の内容を労働者階級と上層ホワイト層で比較した結果である。また図２は、子どもに４年制大学以上を期待する母親の比率を、母学歴と世帯収入別に集計した結果である。

表２　母親の子どもへの進学期待　労働者階級と上層ホワイト層　（p＜.000）

	子への進学期待　「将来、どの段階まで進学してほしいと考えていますか。」							
	中学校まで	高校まで	専門学校まで	短期大学まで	４年制大学まで	大学院修士レベルまで	大学院博士課程まで	合計
労働者階級	0.0%	36.0%	18.3%	12.4%	32.8%	0.5%	0.0%	100.0%
上層ホワイト	0.7%	1.4%	2.1%	1.4%	77.1%	11.8%	5.6%	100.0%

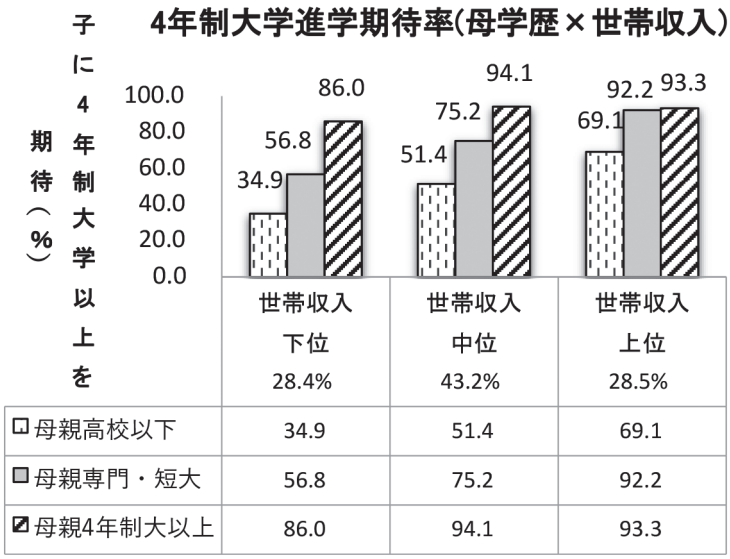


図２　母親の進学期待（母学歴と世帯収入別）（%）

図１及び図２から、親の社会的属性によって子への進学期待に大きな差があることがわかる。親の階級を問わずすべての親が自分の子どもには大学へ行ってほしいと強く思っているわけではない。ちなみに父母の全データでみると、子育ての目標を高学歴におかない親も一定数存在している。具体的には子への進学期待（お子さんには、将来、どの段階まで進学してほしいと考えていますか）は、中学まで 0.2%、高校まで 15.1%、専門学校まで 8.6%、短期大学まで 8.7%、４年制大学まで 61.2%、大学院修士レベルまで 3.7%、大学院博士課程まで 2.4%であった。

（以下、片岡（2018）論文より引用）

中流階級の家庭に特徴的な競争的価値観からみれば、大学へ行かないことや勉強ができないことは子育ての失敗として解釈される。多くの親が子の教育に関心が高いと先行研究は示すが、中流階級の親が、将来、子どももホワイトカラーの地位を獲得するために学力競争をさせるというキャリアモデルとは異なるモデルを労働者階級が持っていることや、労働者階級がホワイトカラーとは異なる子どもの達成を期待している点にももっと目を向ける必要がある。

例えば、ある労働者階級の母親（パートのサービス労働者、40歳代で20歳前後の2人の子どもあり）はインタビューで次のように話してくれた。

> うちの主人はガテン系（土木・建設関係）ですし、息子たち（現在、職人の仕事をしている）もみな身体は丈夫に育ってくれて、とにかく、元気でしっかり働いてくれれば十分なんです。（子の）大学進学も考えないわけではなかったけれど、いいかげんな大学に行って将来が不安定になるよりは、息子も手に職をつけたほうが確実だというし、その方が長い人生を考えると、私も確実な道だと思います。息子たちは高校卒業のあと、本人の希望する職人の道を選びました。

この例のように労働者階級の人々にとって、よりよい生き方のモデルは、会社員や管理職・事務職になることではない場合も多い。大学教育が確実な人生設計をもたらさないのではないかという先行き不安感も強い。この事例では、家族全体が将来的に確実な人生設計として職人を選好していた。ブルデューのいう**技術資本**が、労働者階級にとって利益をもたらすことが語られている（以上、片岡（2018）より引用）。

ここに示された労働者階級の事例は、仕事に対するモラルも高く、態度もきわめて真面目な労働者である母親であった。彼女の家庭はごく普通の健全という言葉がぴったりくる家族関係を築いており、その誠実な人柄から多くの人から高い信頼を受けていた。生活は基本的に質素で、食べ盛りの子どもと夫への配慮から、栄養を落とすことなく食材を工夫することで倹約もしていた。

労働者階級も家族により多様であるため、一概にこうであると決めつけることはできない。あくまで一例に過ぎないが、事例研究を積み重ねる必要があるだろう。先行研究としては、久富（1993）、西田（2012）、伊佐（2014）などがあげられる。

以下では階級による価値観や文化の差異にも配慮しつつ、異なる階級による子育て実践や意識を検討し、子育てプロセスの違いを具体的にみていこう。

7. 母親のライフコースと子育てをめぐる価値意識の階級差

7.1 分析課題

現代では、女性の高学歴化や社会進出の結果、母親であることと社会での一個人であ

ることのバランスをどうとるかという問題が浮上している。そこで女性のライフコースの階級差と子育て意識の階級差をデータからみておこう。

この節での分析課題は、次の５点である。

① 母親の子育てに関連するライフコース選択に階級差はあるのか。

② 家庭責任や親の責任を強調するのは、いずれの階級の母親か。

③ ３歳児神話を信じる割合の階級差はあるのか。

④ 母親の生き方と子育て意識の階級差はどこにあらわれるのか。

⑤ 仕事か育児かに関する保守主義的な子育て観念をより強く持っているのは、いずれの階級の母親か。

7.2　母親のライフコース選択の階級差

(1) 専業主婦率は上層ホワイト層で高い

調査では、母親の専業主婦率は上層ホワイト層のほうがやや高く 36.6％で、労働者階級では 28.5％である（p＜.05）。しかしどちらの階級でも、6 割～ 7 割の女性が子育てをしながら働いている状況があり、子育て段階の女性の労働と家庭の両立問題が生じていると推測できる。

労働者階級の母親の初婚年齢（平均）は 24.3 歳で、上層ホワイト層の 26.8 歳より少し若かった。

(2) 結婚や出産・子育てを理由に仕事をやめる率は労働者階級で高い

結婚を機に仕事を辞める比率は労働者階級（66.1％）のほうが高く、上層ホワイトの 43.7％を上回る（p＜.05）。さらに労働者階級の母親では出産や子育てを理由に仕事や勤務先をやめた率も高い（労働者階級 70.5％＞ 53.3％上層ホワイト、p＜.05）。

これは、労働状況も関係するが、それに加えて以下に示すように、労働者階級の母親に伝統的な性役割分業観が強いことや３歳児神話を信じる割合がやや多いということとも関連していると思われる。

7.3　３歳児神話と階級

調査では「子どもは３歳までは母親の手で育てるべきである」の問に「そう思う」から「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の４件法の選択肢で回答を得た。

調査の全データの分析結果からは、３歳児神話を肯定する女性ほど、「結婚をきっかけに仕事や勤め先をやめた」と答える女性の比率が高かった。子どもは「3 歳までは母親の手で育てるべきである」に「そう思う」と回答した母親（n＝566、母親全ケースの 46.2％）のうちの 63.4％が、結婚を機に仕事や勤め先を辞めている。これに対し、３歳児

神話に「そう思わない」（n＝41）と回答した母親では、結婚を契機とした離職は22.2％、また3歳児神話に「あまりそう思わない」（n＝201）母親でも、42.2％が結婚を契機に離職しており、3歳児神話を肯定する親よりは低かった。3歳児神話を肯定する傾向と、結婚後のライフコースには有意な関連性があることは明らかである。

表3に示すように、「3歳までは母親の手で育てるべき」という意見に「そう思う」と答えたのは、労働者階級の母親に多く50.8％、上層ホワイトで37.9％であった。χ^2検定では3歳児神話への回答と階級の間には、弱い関連があるといえる。

表3　3歳児神話の階級差「子どもは3歳までは母親の手で育てるべきである」（母親）

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	計
ブルーカラー n＝189	50.8%	30.2%	16.9%	2.1%	100.0%
	96	57	32	4	189
上層ホワイト n＝145	37.9%	35.9%	20.0%	6.2%	100.0%
	55	52	29	9	145

p＜.051、両側検定

解釈としては、高学歴女性のほうが、専門職や正規雇用についていることが多いため、仕事を辞めにくく、同じような職種での再就職が難しいので結婚や出産でも仕事の継続率が高いという事情もある。

7.4　出産や子育てのあとに就業する母親率

労働者階級の母親の場合、「出産や子育てのあと再び仕事に就く」ケースが多い（労働者70.5％＞53.3％上層ホワイト，p＜.01）が、それは家計上の問題や労働条件だけではなく、以下に示すように、母親の生き方に対する価値態度や子育て意識の違いとも関連していると考えられる。

7.5　子育て意識と母親の生き方

子育てと母親の生き方については、階層間でどのような違いがあるだろうか。

表4の結果から、上層ホワイト層の母親のほうが労働者階級よりも、「子育ては楽しい」と感じる割合が多い。「よくあてはまる」の回答が労働者の34.4％に対し、上層ホワイト層では51.1％であったからである（p＜.01）。

また「自分は自分、子どもは子どもだとわりきっている」に「よくあてはまる」と回答する母親は、全体としては少ないものの、とくに労働者階級では6.9％と少なく、上層ホワイト層の母親で16.0％とやや多くなる傾向がある（p＜.05）。

そして「子育ては大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と考える親も、労働者階級の14.8％に対し、上層ホワイト層で36.1％があてはまる（p＜.01）と回答していることから、母親自身の生き方を尊重しようとする意識は、上層ホワイト層でより高いといえる。

表1に示したように、労働者階級の母親は、子育てをしながらも働いている割合がやや高く（専業主婦率が低い）、世帯の経済状況も決して恵まれているわけではないので、生活全般への満足度は相対的に低い。「生活全般」に「満足している」「どちらかといえば満足している」と回答した母親は、労働者階級で9.0％（満足）と47.9％（どちらかといえば満足）で、上層ホワイト層では27.6％と56.6％であった（p<.001）。

表4　子育て意識

		よく あてはまる	少し あてはまる	あまりあて はまらない	全く当て はまらない	合計	χ^2検定
a. 子育ては楽しい	労働者階級（n＝189）	34.4%	57.7%	7.9%	0.0%	100.0%	***
	上層ホワイト層（n＝145）	51.0%	40.7%	8.3%	0.0%	100.0%	p＜.006
b. 自分は自分、子どもは子どもだとわりきっている	労働者階級（n＝189）	6.9%	47.1%	39.7%	6.3%	100.0%	**
	上層ホワイト層（n＝144）	16.0%	50.0%	29.2%	4.9%	100.0%	p＜.026
c. 子育ては大事だが、自分の生き方も大事にしたい	労働者階級（n＝189）	14.8%	57.7%	25.9%	1.6%	100.0%	***
	上層ホワイト層（n＝144）	36.1%	51.4%	12.5%	0.0%	100.0%	p＜.0001

***p＜.01,　**p＜.05

7.6　仕事か育児かをめぐる母親の意識

表5の結果に示されるように、労働者階級の母親は仕事か育児のどちらを優先させるべきかという点に関しては、「母親は仕事より育児を優先させたほうがよい」（労働者85.6％＞63.6％上層ホワイト）を圧倒的に多く選んでおり、もう一つの選択肢（2択式）である「母親は、育児より仕事を優先させることがあってよい」を選ぶ親は14.4％と少なかった。

表5　育児か仕事か

	母親は、仕事より育児を優先させたほうがよい	母親は、育児より仕事を優先させることがあってよい	計
労働者階級	85.6%	14.4%	100%
上層ホワイト層	63.6%	36.4%	100%

7.7　新自由主義を支える新保守主義の子育て意識

以上の結果から、労働者階級の母親は、子育てや育児を重視した生き方を「よき母親モデル」として選択する傾向が、上層ホワイト層の母親よりも強いといえるだろう。すなわち労働者階級の母親ほど、仕事より育児優先という形での親の責任を強調する保守主義的な子育て観念をより強く持っていることがわかる。

これは新自由主義的価値観を支える新保守主義的な考え（Apple 2003, 本田 2008）であるといえる。自由競争と自己責任を強調する新自由主義経済思想のもとでは、それを家庭面でも支える価値が、子育てを親の責任、家庭責任として強調し、家庭教育の重要性を強調するというマインドセットである。新自由主義体制がこのような新保守主義的な価値態度を人々に求めているとすれば、それにもっとも都合よく反応するのは、労働者階級であるともいえる。

同時に、上層階層もこのマインドセットを持っている比率は低くはない。家庭教育に関する保守主義的傾向は、教育の公共性の問題として考えなければならないが、別の機会としたい。

育児の母親責任をかなり強く意識している労働者階級の母親という問題を、アメリカのラローの研究に照らし合わせた時に、ラローがアメリカの労働者階級に見出した「自然的成長（放任型子育て）」は、日本の労働者階級にはあてはまらないのではないかという疑問がでてくる。

結果を先取りして述べるならば、労働者階級にみられる育児を重視する子育て観念のしばりが、どのような実践の帰結となるかについて子育てプロセスを検討すると、次節以下に示すように、労働者階級家族の子育て観念と実際の子育て実践や意識は矛盾する現実が浮かび上がってきた。

8. 上層ホワイト家族の勉学志向と労働者家族の平凡志向

図1に示したように、上層ホワイト層の家庭では、その多くが子どもに高い進学期待をよせていた。そして親たちは子どもに「勉強好きになってほしい」と強く期待していた。表6に明らかなように、上層ホワイト層の親の9割以上が、子どもが勉強好きになることを望んでいる。そして大学へ行くことは子どもにとっての将来への投資であると考える傾向にあった（表7）。詳細にみておこう。

表6の**勉学志向の価値観**「自分の子どもには勉強好きになってもらいたい」に、「そう思う」「まあそう思う」者は、労働者階級でそれぞれ20.1％と56.6％、上層ホワイト層では48.3％と44.8％であり、「そう思う」の回答で倍以上の開きを示した。

そして**大学への価値の置き方**にも、大きな違いがみられた（表7）。労働者階級では「大学を卒業することは、子どもの将来の投資になる」という意見に「そう思う」が

7.9％で、上層ホワイト層では33.8％であった。労働者層の親は大学の将来的価値を上層ホワイト層ほどには重視はしていないのである。

すなわち子育てにおける勉学志向、大学志向は上層ホワイト層の特徴であり、労働者階級の親は勉学志向の価値観をそれほど強くは持っていない。表7に示されたように、労働者階級の親は、自らとは縁のなかった大学教育の価値をある程度は予測するものの、そう思わない者も半数いることから、あまり強い期待はしていないといえる。

表6　自分の子どもには、勉強好きになってもらいたい

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
労働者階級	20.1%	56.6%	21.2%	2.1%
上層ホワイト	48.3%	44.8%	6.2%	0.7%
合計	32.3%	51.5%	14.7%	1.5%

p＜.0001

表7　大学を卒業することは、子どもの将来の投資になる

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
労働者階級	7.9%	32.3%	47.1%	12.7%
上層ホワイト	33.8%	44.8%	19.3%	2.1%
合計	19.2%	37.7%	35.0%	8.1%

p＜.0001

教育を媒介とした社会的地位の獲得は、近代以降の主要な地位獲得様式あるいは世代間での地位再生産方式である[i]。中流階級ほど、教育を媒介とした地位達成のルートを重視することが知られている。子どもの将来の達成について、2択で質問をした結果、階級間での差異が見出された。

労働者階級の母親の場合は、子どもの達成に対し、「**平凡志向**」を示すことが多かった（表8）。具体的には「自分の子どもは将来、ふつうの生活ができるくらいに勉強ができれば十分だ」に「そう思う」と回答した母親が31.2％、「まあそう思う」59.8％で、ほぼ

表8　自分の子どもは将来普通の生活ができるくらいに勉強ができれば十分だ

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
労働者階級	31.2%	59.8%	7.9%	1.1%
上層ホワイト	13.8%	50.3%	24.1%	11.7%
合計	23.7%	55.7%	15.0%	5.7%

p＜.0001

9割の労働者階級の親は、子どもに（エリートではなく）「ふつうの生活ができるくらい」という水準を希望していた。しかし上層ホワイト層では、そう思うが13.8%、まあそう思うが50.3%で、合計して約6割強と少なくなり、有意な差が生じている。

さらにジェンダーに関し、「女の子には、高い学歴は必要ない」に「そう思う」母親は、労働者階級で3.7%、上層ホワイト層では0%、さらに「まあそう思う」は労働者階級の19.6%、上層ホワイト層では1.4%であった（表9）。労働者階級の親の2割以上は女子が高学歴になることに消極的な態度を示したが、上層ホワイト層ではほぼないといってよい数値である。ジェンダーや性役割分業に関する価値意識の階級的差異が背景にあると考えられる。

表9　女の子に高い学歴は必要ない

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
労働者階級	3.7%	19.6%	53.4%	23.3%
上層ホワイト	0.0%	1.4%	29.7%	69.0%
合計	2.1%	11.7%	43.1%	43.1%

$p < .0001$

労働者階級の親たちは、先に示したように子育てにおける母親の責任を強く意識しているけれども、それは親の積極的関与によって学力競争をして、エリート的地位を獲得するという上層ホワイト層的な競争観とは異なるのである。すなわち2つの階級フラクションで、教育投資や勉学志向に対する異なる意味づけ、すなわち階級による異なる子育て文化が存在する可能性が高い。

以上の2つの階級フランクションの比較からみえてくる親の子育て意識の状況は、そこに明らかに有意な差異があることを示唆している。しかしながら、これは乗り越えがたい分断化を意味しているのかどうかについては、まだ議論すべき点が多いと考える。なぜなら、ここに示された2つの階級フラクションは全体のなかの両極端であり、その間に、多様な階級状況があり、それぞれにグラデーションの異なる子育て状況が存在していると推測できるからである。

すなわち本稿で明かにされる階級による異なる子育て文化とは、階級と文化が正確に1対1対応して、子育て文化の階級分断化が生じているという事実を意味するのではない。確かに労働者階級と上層ホワイト層の子育てをめぐる状況は、そこにかなりの格差の実態があることを示しているが、それは、あくまで確率論的な意味での2つの類型化が可能という意味である。

そして中間層を含む、両極の階級フラクションの間にある多様な層は、この2つの子

育て実践と意識のいずれかに近いという意味で、本田（2008）のいうように、分断化というよりはグラデーションが存在していると予想できる。

9. 親の価値期待にみる自立性 - 同調性仮説

異なる階層の親は子どもにどのような価値を期待しているのだろうか。親の価値期待に関して、コーン（Kohn 1969）は多くの国で中流階級と労働者階級での子育て価値が異なることを明らかにしている。

コーンによれば中流階級の親は、子どもに自立性（self-direction）を期待するが、労働者階級は外的権威への同調性（conformity）を重視した子育てをするという。日本での検証は高校生データを使った片岡（1989）やSSM調査を用いた池田（1990）、中井（1991）、尾嶋ほか（1996）などの研究があるが、それぞれ分析対象が異なっているので明確な結論はでていないともいえる。

表 10　親の価値期待

将来どんな大人になってほしいと思いますか。 とくに重要と思うものを３つまで選んで○をつけて下さい。				
	労働者階級		上層ホワイト層	
他人に思いやりがある人	76.2%（n＝144）	1 位	82.1%（n＝119）	1 位
礼儀正しい人	52.4%（n＝99）	2 位	37.2%（n＝54）	2 位
お金や物を大切にする人	44.4%（n＝174）	3 位	22.1%（n＝32）	7 位
忍耐力がある人	39.2%（n＝74）	4 位	22.8%（n＝33）	6 位
協調性がある人	27.5%（n＝52）	5 位	22.1%（n＝32）	7 位
公正さや正義感がある人	20.1%（n＝38）	6 位	31.0%（n＝45）	3 位
人から頼りにされる人	16.9%（n＝32）	7 位	20.7%（n＝30）	9 位
社会で役立とうとする人	10.6%（n＝20）	8 位	25.5%（n＝37）	5 位
教養がある人	7.9%（n＝30）	9 位	30.3%（n＝44）	4 位

今回のデータでも**表 10** に明らかなように、「他人に思いやりがある人」と「礼儀正しい人」が最も強く支持されていたので、この２項目は階層を問わず日本人文化として内面化すべき重要な項目であることがわかる。

そして２位以下の価値期待の内容には大きな階層差が生じていた。「外的権威への同調」の一つのあらわれでもある「礼儀正しさ」をより重視するのは、労働者階級（52.4%＞上層ホワイト 37.2%）であることから、権威への同調傾向は労働者階級の親に強く現れているともいえる。

また労働者階級は「お金や物を大切にすること」や「忍耐力がある人」を上層ホワイト層と比べると、より高く支持していた。これらの価値項目は、いずれも他者や外的権威に従順であることを意味する同調性指標である。労働者階級ほど同調性を強調した価値を子どもに期待していることがわかる。

他方、上層階層では、3位から5位に「自立性」の指標となる「公正さや正義感がある人」「教養がある人」「社会で役立とうとする人」がきて、自分の責任、自分の判断に関わる自立性に関わる項目が上位を占めていた。そして先ほどみたように、同調性への価値期待は順位も低い。

ここに示すように、親への調査からは、日本ではあまり明確ではなかったコーンの自立性―同調性の階層性仮説が日本でも階級フラクションという部分的データの比較では、支持できることがわかる。ただし、その差異は大きいとはいえないので、親の価値期待については、さらに検討が必要である。

10. しつけ方法にあらわれる階級差

子育てを計画的に統制的な方法で行うのか、それとも子どもの自由や自律性にまかせてあまり干渉はしないのかについて、みておこう。

子どもの年齢段階によっても異なるが、統制的でない緩やかな子育てについて、「子どもに対して甘い親か」「子どものやりたいようにさせて、あまり干渉しない」を指標として尋ねた結果、階級差はみられなかった（表11）。

しかししつけ方法について、統制型か説諭型かをそれぞれ尋ねたところ、「子どもが言うことをきかないときは、たたいてでもしつける」（統制型）親は労働者階級に多くみられ、「子どもが言うことをきかないときは、分かるまで言葉でさとす」（説諭型）は上層ホワイト層に多くみられた。

言葉を使って、子どもとの関係を調整しようとする親が上層ホワイト層に多いというのは、Bronfenbrenner（1958）など海外の先行研究の知見とも一致している。さらにラロー（Lareau　2003）の観察したアメリカの中流階級にも共通する特徴である。

表11　しつけ方法の階級差

	労働者階級（n＝189）	上層ホワイト（n＝145）	
子どもに対して甘い親である	63.3%	58.6%	n.s.
子どもが言うことをきかないときは、たたいてでもしつける	55.3%	42.8%	p=.003
子どもが言うことをきかないときは、分かるまで言葉でさとす	79.9%	83.4%	p=.044

数値は、4件法で「よくあてはまる」と「少しあてはまる」に○をつけた回答者の比率

11. 休日の過ごし方

子どもの休日の過ごし方をみると、階級差が大きくあらわれる項目が多かった（表12）。

労働者階級の子どもたちは上層ホワイト層の子どもたちと比べて、休日にテレビをみたり、ゲームをしていることが多い。また買物やショッピング、ゲームセンターにも行く機会が多い。また家事や家の手伝いもしている。すなわち地域や家族という狭い範囲のなかで、消費的な活動に多く関わっている。この点は、ラローが明らかにしたアメリカの労働者階級の子ども達と共通する特徴を示している。

これに対して、上層ホワイト層の子どものほうが多かったのは、塾・予備校へ行く、漫画や本を読む、楽器の演奏・工作などの趣味を楽しむ、家族とドライブ・旅行を楽し

表12　子どもの休日の過ごし方

変　数	労働者階級（n＝189）	上層ホワイト層（n＝145）	
何もしないで、だらだらする	9.5%	11.7%	
家族とおしゃべりをする	57.7%	62.8%	
学校の部活動をする	15.3%	19.3%	
テレビをみる	71.4%	55.2%	**
テレビゲームやゲームソフトで遊ぶ	57.7%	37.2%	***
音楽をきく	19.0%	22.8%	
マンガや本を読む	43.4%	55.9%	*
勉強をする、塾や予備校へ通う	16.9%	31.0%	**
パソコンやインターネットをする	12.2%	19.3%	
楽器の演奏・工作などの趣味を楽しむ	9.5%	26.9%	***
友達やきょうだいと遊ぶ	73.5%	59.3%	**
スポーツや運動をする	25.4%	31.7%	
家族とドライブ、旅行などを楽しむ	30.2%	43.4%	*
買物・ショッピングに行く	63.0%	51.0%	*
映画・スポーツなどを見に行く	12.2%	15.9%	
ゲームセンターへ行く	11.1%	3.4%	*
家事や家の手伝いをする	30.7%	22.1%	
ボランティア活動や社会活動をする	0.5%	2.8%	
その他	5.8%	7.6%	
休日に何をしているか知らない	0.0%	0.0%	

***p＜.001　**p＜.01　*p＜.05

むであった。

以上のことから、労働者階級の子どもたちの休日行動は上層ホワイトの子どもよりも、地域内や家庭の中により限定される傾向にあることがわかる。

それに対し上層ホワイトの子どもの休日は、勉強や塾や読書、楽器などの趣味、旅行など、より活動的で、勉学や芸術などの創造的な活動に関与している率が高い。活動内容も多岐にわたっている。活動範囲も、家族や地域に限定されず、広い範囲で活動していた。

労働者階級の子どもが勉強や芸術文化よりも消費的な活動に偏るのは、親の経済資本だけでなく文化資本の少なさにもよるのであると考えられる。

12. 親の学校への関与：積極的に関与する上層ホワイト層の親

親と学校の関係をみておこう。これまでの先行研究が示すように、本データにおいても、階級と学校（や園）への関与は、かなり強い関連があった。しかし学校行事への参加頻度や学校への親の要望を伝える頻度には、階級差は見いだせなかった。

母親の学校や子どもの先生に対する意識の結果は、**表 13** に示される。まず「保護者懇談会に積極的に参加している」親は、上層ホワイト層に有意に多い。逆に「先生の教え方に不満がある」と回答した親は、労働者階級で高くなっていた。また学校や園の先生の言うことを「信頼できる」、先生を「尊敬している」親は、上層ホワイトに多いが、大

表 13　学校への関与

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
a. 学校や園の先生の言うことは、信頼できる	労働者階級	14.1%	62.2%	20.0%	3.8%	
	上層ホワイト	22.4%	62.9%	13.3%	1.4%	†
b. 先生を尊敬している	労働者階級	16.2%	50.3%	27.0%	6.5%	
	上層ホワイト	22.4%	57.3%	18.9%	1.4%	*
c. 学校や園の先生の教え方には、不満がある	労働者階級	3.2%	34.6%	51.4%	10.8%	
	上層ホワイト	3.5%	22.4%	51.0%	23.1%	**
d. 保護者懇談会に、積極的に参加している	労働者階級	30.8%	38.4%	25.4%	5.4%	
	上層ホワイト	53.8%	28.7%	14.0%	3.5%	***
e. 学校や園の行事には、必ず参加している	労働者階級	49.7%	38.4%	9.2%	2.7%	
	上層ホワイト	57.3%	32.9%	8.4%	1.4%	ns
f. 学校や園に対して、親の要望を伝えることがある	労働者階級	8.1%	37.8%	43.8%	10.3%	
	上層ホワイト	9.2%	40.8%	41.5%	8.5%	ns

***p＜.001　**＜.01　*p＜.05　†p＜.10

きな差異ではない。

全体として、子どもの教師や学校との関係において、定説とは異なる点は、学校行事への参加頻度に階級差が見いだせないという点である。また学校や園への親の要望を伝える率についても、階級差はなかった。

13. 家庭での教育実践と家族の子育て、子どもの実態

最後に家庭での教育実践としつけ行動をみておこう。親の子どもへの関与は年齢段階によって異なるものの、ここでは親や子の年齢は統制せずに、母親全体の階級別集計を示す。親が日常的にどの程度、子どもに関与しているかを、日常的実践、配偶者の協力、勉強への関与、文化資本の伝達の観点から比較しよう。

13.1　日常的な関与としつけ、夫婦の協力関係

本節で明らかにしたい点は、次の２つである。

(1) 日常的な子どもへの関与の違いが、階級によって異なるのではないか。

(2) 子育てへの夫の協力を得られるのは、学歴の高い上層ホワイト層に多いのではないか。

表 14 に示すように、「子どもと一緒に遊ぶ」の頻度を５段階で測定した結果、「毎日する」親は全体で 10.7％だが、上層ホワイト層では 23.6％、労働者階級では 9.6％と差が生じている。さらに、「子どもに対して「ありがとう」や「ただいま」「おやすみ」などの言葉を使う」を毎日する親は上層ホワイト層では 82.6％で、労働者階級では 64.4％であった。

表 14　日常の子育て実践

		まったくしない	あまりしない	ときどきする	よくする	毎日する	計	
a. 子どもと一緒に遊ぶ	労働者階級	2.1%	16.5%	45.7%	26.1%	9.6%	100.0%	
	上層ホワイト	2.8%	17.4%	36.8%	19.4%	23.6%	100.0%	p＜.009
	全体	2.4%	16.9%	41.9%	23.2%	15.7%	100.0%	

		まったくしない	あまりしない	ときどきする	よくする	毎日する	計	
b. 子どもに対して「ありがとう、ただいま、おやすみ」等の言葉を言う	労働者階級	0.0%	1.1%	8.5%	26.1%	64.4%	100.0%	
	上層ホワイト	0.0%	0.0%	4.2%	13.2%	82.6%	100.0%	p＜.003
	全体	0.0%	0.6%	6.6%	20.5%	72.3%	100.0%	

		まったくしない	あまりしない	ときどきする	よくする	毎日する	計	
c. 子どものことで、配偶者と話しあう	労働者階級	2.7%	9.0%	42.0%	37.2%	9.0%	100.0%	
	上層ホワイト	0.0%	5.6%	31.9%	41.7%	20.8%	100.0%	p＜.003
	全体	1.5%	7.5%	37.7%	39.2%	14.2%	100.0%	

日常的な子どもへの関与は上層ホワイト層の子育て実践に夫がどの程度かかわって協力しているかという点では、明らかに上層ホワイト層の家庭のほうが、夫の協力度が高い。たとえば「子どものことで配偶者と話し合う」頻度について尋ねると、「毎日する」「よくする」親は、上層ホワイトの 62.5％に対し、労働者階級では 46.2％と相対的に少ない。

14. 勉強ハビトゥスと文化資本の伝達

本節で明らかにする課題は、次のとおりである。

(1) 親の勉強ハビトゥスが子どもに伝達されているのではないか。

(2) 上層階層の子育てでは文化資本の伝達が重視され、階級差があるのではないか。

14.1 勉強ハビトゥスの再生産

子どもの勉学に関心の高い上層ホワイトでは、子育ての中で積極的に子どもの宿題をみたりする習慣がある。調査で「子どもの宿題や勉強をみる」に「毎日する」「よくする」と回答した親は、上層ホワイトで 49.3％、労働者階級では 23.5％と 2 倍以上の差が示された。

この背景には、明らかに母親自身の勉強ハビトゥスや文化資本の差異がある（表 17）。

たとえば勉強ハビトゥスについて、その一端を示すと、上層ホワイト層は「私は勉強することが好きである」という問に肯定する親が 72.4％に対し、労働者階級では 20.6％と大きな差が存在した。

表 15　勉強ハビトゥスの形成

		まったくしない	あまりしない	ときどきする	よくする	毎日する	計	
子どもの宿題や勉強をみる	労働者階級	7.6%	25.9%	33.0%	21.6%	11.9%	100.0%	
	上層ホワイト	6.9%	11.1%	32.6%	25.7%	23.6%	100.0%	
	全体	7.3%	19.5%	32.8%	23.4%	17.0%	100.0%	p＜.003

上層ホワイト層にあらわれる子の勉学志向醸成、勉強ハビトゥスの強調と子どもの学業達成への親の積極的関与の背景には、**勉強ハビトゥスの世代間伝達**という親の教育実践を伴う積極的関与があるといえよう。

14.2 読書文化資本と芸術文化資本の形成と再生産

文化資本の伝達においても、階級差は明瞭に現れていた。

「読書文化資本」について**表 16** に示すように、「子どもに本の読み聞かせをする」ことが「よくある（よくあった）」親は、上層ホワイトの 64.8％、労働者階級の 34.9％と差は

大きい。

「芸術文化資本」については、「子どもと美術館や博物館へ行く」「子どものクラシック音楽をきいたり、クラシック・コンサートへ行く」において、階級差が大きく、上層ホワイト層ほど芸術文化資本、読書文化資本ともに子どもに経験させ、文化資本を獲得させるという教育戦略をとっていた。これは過去の先行研究とも一致する結果である。読書文化資本については、片岡（1998，2001）のほか、片瀬（2004）ほかの研究とも一致する結果である。

このような文化資本の伝達を行う家庭では、親自身の文化資本が高いということを指摘できる。表17に示したように、「専門書を読んだり、本を読むことが好き」と答える親は、上層ホワイトで有意に高い（上層ホワイト77.2%＞39.7%）。さらに「政治や経済などの時事問題にくわしい」のも上層ホワイト層で多く39.3%であったが、労働者階級では11.1%に留まる。

言語資本についても、「話し方やことば使いは、ていねいで礼儀正しい」という親は上層ホワイト層の79.4%に対し、労働者階級では35.5%と大きな差がみられた。また親自身の趣味からみえてくる文化資本の得点も、上層ホワイト層で有意に高かった（結果省略）。

このように2つの階級フラクションの差は、親の文化資本に関する項目でもっとも顕著である。

これらの結果から、上層ホワイト層では、子どもの読書体験や芸術文化体験を親が積極的にマネージしていることがうかがえる。親自身の高い文化資本がそれを促しており、やはりここでも**文化資本の再生産**ということがブルデューのいうように家庭を通じて早期から行われている（Bourdieu 1979＝1990、片岡　1998，2001）ことが再確認できた。

14.3　大衆文化の再生産

他方、これまであまり明らかにされてこなかった大衆文化については、「子どもをつれてカラオケに行く」かどうかを尋ねた。カラオケに子どもを連れていく親（よくある（あった）、ときどきある（あった））は、労働者階級の44.5%に対し、上層ホワイトでは20.0%と差異が生じている（表16）。

15. 階級文化の成立か、グラデーションか？

以上の結果をまとめると、親たちの子育て実践と子育て文化・価値には、階級による差異が、一定程度、明確に存在している。なかでも文化資本の子への伝達や勉強ハビトゥスの伝達を、上層ホワイト層の親は強く意識し、実践していた。また親の子どもへの関与が、学ぶことや教育投資を中心として、多様な側面（全方位的）にあらわれるのが上層ホワイト層の親の子育ての特徴であった。そしてこの「懸命な子育てconcerned

表 16　文化資本の伝達

		ない（なかった）	あまりない（なかった）	ときどきある（あった）	よくある（あった）	計	
読書文化資本 子どもに本の読み聞かせをする	労働者階級	4.2%	13.2%	47.6%	34.9%	100.0%	
	上層ホワイト	1.4%	4.8%	29.0%	64.8%	100.0%	
	全体	3.0%	9.6%	39.5%	47.9%	100.0%	p＜.0001

		ない（なかった）	あまりない（なかった）	ときどきある（あった）	よくある（あった）	計	
芸術文化資本 子どもと美術館や博物館へ行く	労働者階級	29.1%	30.7%	39.7%	0.5%	100.0%	
	上層ホワイト	13.1%	26.9%	46.2%	13.8%	100.0%	
	全体	22.2%	29.0%	42.5%	6.3%	100.0%	p＜.0001

		ない（なかった）	あまりない（なかった）	ときどきある（あった）	よくある（あった）	計	
芸術文化資本 子どもとクラシック音楽をきいたり、クラシックコンサートへ行く	労働者階級	75.7%	18.0%	5.8%	0.5%	100.0%	
	上層ホワイト	33.1%	26.9%	30.3%	9.7%	100.0%	
	全体	57.2%	21.9%	16.5%	4.5%	100.0%	p＜.0001

		ない（なかった）	あまりない（なかった）	ときどきある（あった）	よくある（あった）	計	
大衆文化 子どもを連れて、カラオケに行く	労働者階級	34.9%	20.6%	39.2%	5.3%	100.0%	
	上層ホワイト	55.9%	24.1%	19.3%	0.7%	100.0%	
	全体	44.0%	22.2%	30.5%	3.3%	100.0%	p＜.0001

表 17　親の文化資本

		よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	計	
私は勉強することが好きである	労働者階級	3.7%	16.9%	51.9%	27.5%	100.0%	
	上層ホワイト	26.2%	46.2%	24.8%	2.8%	100.0%	
	全体	13.5%	29.6%	40.1%	16.8%	100.0%	p＜.0001

		よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	計	
専門書を読んだり、本を読むことが好きだ	労働者階級	12.7%	27.0%	40.7%	19.6%	100.0%	
	上層ホワイト	33.1%	44.1%	17.9%	4.8%	100.0%	
	全体	21.6%	34.4%	30.8%	13.2%	100.0%	p＜.0001

		よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	計	
政治や経済などの、時事問題にくわしいほうだ	労働者階級	0.5%	10.6%	54.5%	34.4%	100.0%	
	上層ホワイト	4.8%	34.5%	46.9%	13.8%	100.0%	
	全体	2.4%	21.0%	51.2%	25.4%	100.0%	p＜.0001

		よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	計	
話し方やことば使いは、ていねいで礼儀正しい	労働者階級	3.2%	32.3%	54.0%	10.6%	100.0%	
	上層ホワイト	16.6%	62.8%	17.9%	2.8%	100.0%	
	全体	9.0%	45.5%	38.3%	7.2%	100.0%	p＜.0001

cultivation」は子どもの異なる学力達成や社会的成功の差異を生み出す恒常的な力として作用していることを示唆しているものでもあった。

上層ホワイト層の子育て実践も、ラローがアメリカで見出した傾向、あるいは本田が見出した傾向と類似しており、文化資本に裏付けられた豊かな情緒的あるいは思考力をも伴っていると考えられる。持てる資本（経済・文化・社会関係）が相対的に少ない労働者階級の親にとっては明らかに不利な競争であり闘いである。

しかし労働者階級でも経済資本さえあれば子育てで上昇移動をめざすのか、それとも競争から離脱して別のキャリアを志向する文化を持っているのかなど、階級文化の成立と成熟がどの程度の段階にあるかを議論すべき時期にきている。

表 18　労働者階級（母）の世帯年収別の進学期待

世帯年収	将来、どの段階まで進学してほしいと考えていますか。						合計
	高校まで	専門学校まで	短期大学まで	4 年制大学まで	大学院修士レベルまで	大学院博士課程まで	
499 万以下	35	15	13	22	1	0	86
	40.7%	17.4%	15.1%	25.6%	1.2%	0	100.0%
500 万以上	30	18	9	36	0	0	93
	32.3%	19.4%	9.7%	38.7%	0.0%	0	100.0%

n.s.

表 18 では、労働者階級の母親を世帯年収 500 万を基準に 2 つに分けて、子への進学期待を見た結果であるが、年収にかかわらず進学期待に有意な差は生じていなかった。つまり進学期待は収入が高くなっても、大きくは変化しないということになる。この点については、別の方法によっても慎重に検討する必要があるだろう。

16. 結論

子育て実践にみる階級差はある程度明瞭ではあるが、吉川（2009）のいうように「学歴分断社会」と言い切ってよいのか、それとも本田（2008）のいうように「グラデーション」なのかについて、暫定的な見解を述べておきたい。

本分析の対比した階級フラクションの分析からは、この 2 つの部分集団は、文化資本や経済資本の点では大きな差異を示す。そして子育て実践についても、勉学志向や文化資本の伝達においては、かなり差異がみられた。しかしそれ以外の子育てへの関与や学校への関わり方に関しては、差異はあるものの分断とまでは言い切れないのではないか。

とくに子育て意識の面では、差異はあるものの、異質な子育て価値観というところまでは至っていないようにみえる。

本分析からいえることは、親の文化資本の影響は、子育て全般にわたり影響を及ぼし、

日常的な差異の積み重ねが、進路や学力、地位達成の階級差を生み出しているということである。

親の文化資本とその背景にある社会経済的地位の問題は、とくに子育て実践においては文化資本の伝達の部分に大きな差として現れていることが、表16や表17から読み取れるだろう。これらが親の子への進学期待にみる大きな階級差になっているのである。

子育て実践にみられる階級差が、ひとつの階級文化として定着していきつつあるのかどうか、イギリスの野郎ども（lads: ポール・ウィリス　1985）の世界のような労働者階級文化へと進み、たとえ能力が高くても上をめざさなくなることがあるのかどうか、他の質的研究も参考に慎重に検討していく必要がある。

＊本研究は、科学研究費補助金 JSPS17330183（基盤研究（B）　研究代表　片岡栄美）の研究成果の一部である。

文献

Apple, M.W., 2003, “Are Markets in Education Democratic? Neo Liberalism, Vouchers, and the Politics of Choice”, （黒崎勲編『多元化社会の公教育』日日教育文庫，173-207.

Ball Stephen J., 2003, *Class Strategies and the Education Market: The Middle Classes and Social Advantage*, Routledge-Falmer.

Bourdieu, Pierre et J.C. Passeron, 1970, *La Reproduction: elements pour une theorie du systeme d’enseignement*. Paris: Editions du Minuit.（＝1991，宮島喬訳『再生産―教育・文化・社会』藤原書店）.

Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction, Critique Sociale du Jugement*, Minuit, Paris.（＝1990『ディスタンクシオン―社会的判断力批判―Ⅰ，Ⅱ』石井洋二郎訳，藤原書店.）

Bronfenbrenner, U., 1958, “Socialization and Social Class through Time and Space,” in E. Maccoby, T.M. Newcomb, and E. L. Hartley（eds）, *Readings in Social Psychology*. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Heckman, James, 2006,（＝2015，ジェームズ・J・ヘックマン『幼児教育の経済学』，古草秀子訳，東洋経済新報社）.

平沢和司，古田和久，藤原翔，2013,「社会階層と教育研究の動向と課題―高学歴化社会における格差の構造―」『教育社会学研究』93：151-191.

広田照幸，1999,『日本人のしつけは衰退したか―「教育する家族」のゆくえ』講談社現代新書.

————，2004，『思考のフロンティア　教育』岩波書店.

本田由紀，2004，「非教育ママ」たちの所在」本田由紀編『女性の就業と親子関係：母親たちの階層戦略』勁草書房，167-184.

————，2008，『「家庭教育」の隘路―子育てに脅迫される母親たち』勁草書房.

池田寛，1990，「親の教育価値と階層」『教育と社会移動』（1985 年社会階層と社会移動の全国調査報告書』第 3 巻）.

伊佐夏美，2014，「家庭教育の階層差に対する教師のまなざし」，『龍谷教職ジャーナル』2：1-20.

石川ゆかり・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子，2011，『格差社会を生きる家族―教育意識と地域・ジェンダー』有信堂高文社.

神原文子・高田洋子編，2000，『教育期の子育てと親子関係』ミネルヴァ書房.

片岡栄美，1989，「しつけと社会階層の関連性に関する分析」『大阪大学人間科学部紀要』13：25-51.

————，1998，「地位形成に及ぼす読書文化と芸術文化の効果－教育・職業・結婚における文化資本の転換効果と収益―」，片岡栄美編『文化と社会階層』（1995 年 SSM 調査シリーズ 18），1995 年 SSM 調査研究会，171-192.

————，2001，「教育達成過程における家族の教育戦略　―文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に―」『教育学研究』第 68 巻 3 号，1-15.

————，2009，「格差社会と小・中学受験－受験を通じた社会的閉鎖、リスク回避、異質な他者への寛容性」『家族社会学研究』（特集　経済の階層化と近代家族の変容―子育て二極化をめぐって）21（1）：30-44.

————，2018，「教育格差とペアレントクラシー再考」，稲垣恭子・内田良編『変容する社会と教育のゆくえ　教育社会学のフロンティア 2 巻』，岩波書店.

片岡栄美編，2008，『子どものしつけ・教育戦略の社会学的研究－階層性・公共性・プライヴァタイゼーション』科学研究費報告書（基盤研究（B）代表　片岡栄美　課題番号 17330183）.

片瀬一男，2004，「文化資本と教育アスピレーション：読書文化資本・芸術文化資本の相続と獲得」人間情報学研究，9：15-29.

片瀬一男・平沢和司，2008，「少子化と教育投資・教育達成」『教育社会学研究』82：43-59.

吉川徹，2009，『学歴分断社会』ちくま新書.

久富善之，1993，『豊かさの底辺に生きる』青木書店.

Kohn, M., 1969, *Class and Conformity: A Study in Values*, University of Chicago Press.

Lareau, A., 2011＝2003, *Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life*, second edition, University of California Press.

中井美樹，1991,「社会階層と親の価値期待」,『現代社会学研究』4：34-57.

中澤智恵・余田翔平，2014,「＜家族と教育＞に関する研究動向」『教育社会学研究』95：171-205.

二関隆美，1971,「母親の教育態度と子どもとの関連―教育ママの子はどんな子か」『青少年問題研究』大阪府青少年問題研究会，19：1-34.

西田芳正，2012,『排除する社会・排除に抗する学校』大阪大学出版会.

大前敦巳・石黒万里子・知念渉，2015,「文化的再生産をめぐる経験的研究の展開」『教育社会学研究』97：125-164.

尾嶋史章・吉川徹・直井優，1996,「社会的態度の親子３者連関の国際比較：90 年代日本と 70 年代アメリカ」『家族社会学研究』8：111-124.

Putnam, Robert D., 2015, *Our Kids*: *The American Dream in Crisis*, Simon & Schuster（『われらの子ども　米国における機会格差の拡大』（＝2017，ロバート・D・パットナム，柴内康文訳，創元社）.

Willis, P. E., 1977, *Learning to Labor: : How Working Class Lads Get Working Class Jobs,* Saxon House,（＝1985，ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども―学校への反抗　労働への順応』熊沢誠・山田潤訳，筑摩書房）.

注

[i] ブルデューが示したように、高い教育達成をめざす中流階級の戦略は、学校システムの自立性を担保しつつ、中流階級の再生産を正当化するという客観的共謀の上に成り立っている。

[ii] ブルーカラー職として集計した職種は、農林漁業、職人・技能労働、一般作業（製造・組立・修理など）、建設・土木作業、運輸職、保安職、ガードマン・守衛である。このうち経営者や役員は除外した。父親全体の 26.8％がブルーカラー職に分類された。ここでの２つの階級フラクションのネーミングは社会階級の一般的な分類とは必ずしも一致させていない